

称号及び氏名	博士（保健学）	永田 優馬
学位授与の日付	平成30年3月31日	
論文名	重度認知症の Quality of Life Quality of Life in Severe Dementia	
論文審査委員	主査	西川 隆
	副査	日垣 一男
	副査	内藤 泰男

論文要旨

認知症は重症化すると“死に至る病”であると広く認識されている。厚生労働省の推計によれば、本邦の認知症者の数は2010年で280万人、2025年には470万人に至ると予測されている。認知症者の爆発的な増加と未だ根治的治療が開発されていない現状のために、今後ますます多くの人々が認知症の重度段階を経験することが予測される。そのため、重度認知症者に対する end-of-life アプローチの目標として、治療者は Quality of Life (QoL) の改善を図る上でどのような因子が彼らの QoL に寄与しているのかを明らかにすることは非常に重要である。しかし、重度認知症者の QoL に関するエビデンスは非常に不足している。

第1章では重度認知症者の QoL に関する知見を QoL の構成概念と尺度、および因子それぞれの観点から整理した。その結果、重度認知症者は軽度～中等度認知症者とでは、QoL の構成概念が異なることがわかった。そのため、重度認知症者に特異的な QoL 尺度が海外では開発され、QoL に寄与する因子がいくつか明らかになっていた。しかし、本邦では重度認知症者に特化した QoL 評価尺度は見当たらず、寄与する因子を調査した報告は見当たらなかった。

そこで、第2章では海外で使用されている重度認知症者用の QoL 評価尺度の日本語版の作成に関わる研究を報告した。国際的に用いられている Quality of Life in Late Stage

Dementia (QUALID)に対して、原著者の許可をとり日本語版を作成し、信頼性・妥当性を報告した (QUALID-J)。第1節では QUALID-J を 73 名の認知症者を対象に評価を実施し、臨床的有用性を検討した。その結果、QUALID-J は十分な評価者間信頼性、検査-再検査信頼性を示した。並存妥当性の検討では、Quality of Life for Alzheimer Disease (QoL-AD)と適切な妥当性があった。構成概念妥当性の検討では、Mini-Mental State Examination (MMSE)、Cognitive Test for Severe Dementia (CTSD)、Neuropsychiatry Inventory-Nursing Home version (NPI-NH)、Cornell Scale for Depression in Dementia (CSDD)、Physical Self-Maintenance Scale (PSMS)、Pain Assessment in Advanced Dementia (PAINAD)とも良好な妥当性を示した。以上より、我々の QUALID-J の計量心理的測定では、本邦の重度認知症者に対しても十分な信頼性・妥当性をもつ尺度であると考えられた。第2節では QUALID-J を用いて、作業療法士による評価と、病棟スタッフ (看護師・介護士) による評価間の信頼性の検討を行った。対象者 33 名を評価した結果、「微笑む」「交流を楽しむ」を除いたすべての項目で、有意な評価者間信頼性が得られた。本研究の結果から、QUALID-J を用いて重度認知症者を評価する際にこれらの項目について看護師や介護士に確認をとることにより、作業療法士も対象者の QoL を適切に評価できると考えられた。第3節では QUALID-J の構成因子を分析した。108 名の認知症者を対象に QUALID-J による評価を実施した。因子分析の結果、三つの因子が抽出され、それぞれに因子 1 (快表出)、因子 2 (消極的不快表出)、因子 3 (積極的不快表出)と名付けた。各因子を反映する項目の合計得点とその他の尺度との相関を検討した結果、因子 1 は認知機能検査である MMSE と、CTSD、日常生活動作の評価尺度である PSMS、苦痛の評価尺度である PAIN-AD と相関していた。因子 2 および因子 3 はともに行動心理症状の評価尺度である NPI-NH と、CSDD、苦痛の評価尺度である PAINAD と相関していた。今回の研究は、海外における先行研究と一致しており、QUALID-J の因子構造は国際的に共通しているものと考えられた。

最後に、第3章ではQUALID-Jを用いて重度認知症者のQoLに寄与する因子を検討した。79名の認知症者を対象にQUALID-Jによる評価を実施した。QUALID-Jの総得点および各下位因子1~3を従属変数とし、年齢、性別、CTSD、PSMS、NPI-NH、PAINAD、そして環境評価尺度であるSpecial Care Unit Environment Quality Scale)を独立変数とした。重回帰分析の結果、Behavioral and Psychological Symptom in Dementia (BPSD)と苦痛の因子が重要であることがわかった。

審査結果の要旨

永田優馬君の研究は、重度認知症者の Quality of Life (QoL) の要件とは何かを追究した研究である。永田君はまず、認知症を対象としてこれまでに世界で開発されてきた QoL 尺度に関する膨大な文献を遍く渉猟し、それぞれの評価法の構成概念と構成因子、各項目が含ま

れる領域を詳しくレビューして、それらが開発されてきた理論的背景と相互の脈絡を明らかにした。その結果、認知症の QoL は重症度ごとに異なる構成概念を有し、重視すべき因子も異なることが示されたが、現時点では重度認知症者に特異的な QoL 尺度は国際的にも数少なく、日本ではいまだ導入されていないことより、国際的に使用されている Quality of Life in Late Stage Dementia (QUALID) を原著者の許可を得て日本語版 (QUALID-J) を作成し、その信頼性・妥当性を確認した。さらに、多数の重度認知症者に関して多種の認知機能検査・ADL 尺度・精神症状評価とともに QUALID-J による評価を行い、諸検査を横断した因子分析の結果から、重度認知症 QoL に寄与する因子を抽出し、重度認知症者においては、Behavioral and Psychological Symptom in Dementia (BPSD) と苦痛の因子が重要であることなどを明らかにした。これらの研究成果の一部はすでに国際的専門誌に報告されている。

永田君の一連の研究は、今後ますます増加する重度認知症者の治療目標に関して重要な視点を提起するとともに、治療効果の判定に有用な評価手法を提供するものであり、認知症の診療と介護に大きく貢献することが期待される。

以上より、当審査委員会は永田優馬君に対し、本学より博士号の学位を授与するにふさわしいものと判定した。